

# 『保元物語』 崇徳院自筆五部大乘經の検討

山田雄司

## はじめに

『保元物語』における崇徳院怨霊譚は、物語中の最大の山場であり、この記述が崇徳院を恐るべき怨霊として、現在に至るまで人々に認識させる決定的な方向づけを行うこととなった。

これまでの国文学の方面からの『保元物語』研究は、諸本間および『平家物語』諸本との異同を考察しようとするものが多数を占めている。そしてそこから諸本の伝本系統を考えていくとし、これには多くの研究があるが、『保元物語』の成立時期、および諸本の先後関係が確定されたわけではない。さらに、本文中に記される事象がそのまま信じられてきた感があり、「物語」という視点から、どのように話が創造されていったのかという点については、ほとんど考察されていないと言つてよいだろう。本稿では、崇徳院怨霊譚の中でも、崇徳院自筆五部大乘經に着目し、どのような構想から五部大乘經が考え出され、諸本間の違いはいかなる背景によつて生み出されたのかを考察しようとするものである。その過程で諸本の異同について言及していくことになるが、諸本の系譜関係を明らかにしようとするものではない。なぜなら、限定された部分をもつて全体を論ずること

とは大きなリスクを伴い、諸部分を細部にわたつて検討していく必要があるからである。

崇徳院自筆五部大乘經の存在は、『吉記』寿永二年(一一八三)七月十六日条に、

崇徳院自筆五部大乘經、可有<sup>レ</sup>供養<sup>ニ</sup>之由、沙汰事<sup>ニ</sup>崇徳院於<sup>ニ</sup>讃岐<sup>ニ</sup>、御自筆以<sup>レ</sup>血令<sup>レ</sup>書<sup>ニ</sup>五部大乘經<sup>ニ</sup>給、<sup>レ</sup>件經奥生料<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>滅<sup>ニ</sup>亡天下<sup>ニ</sup>之趣、被<sup>ニ</sup>注置<sup>ニ</sup>、件經伝在<sup>ニ</sup>元性法印許<sup>ニ</sup>、依<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>申<sup>ニ</sup>此旨<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>成勝寺<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>供養<sup>ニ</sup>之由、以<sup>ニ</sup>右大弁<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>仰<sup>ニ</sup>左少弁光長<sup>ニ</sup>、為<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>道彼怨霊<sup>ニ</sup>歟、但尤可<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>予議<sup>ニ</sup>歟、未<sup>ニ</sup>供養<sup>ニ</sup>之以前猶果<sup>ニ</sup>其願<sup>ニ</sup>、況於<sup>ニ</sup>開題之後<sup>ニ</sup>哉、能々可有<sup>ニ</sup>沙汰<sup>ニ</sup>事也、可<sup>レ</sup>恐々々、と記されているため、先字はこれを当然の事実として疑わなかったが、旧稿では、崇徳院が書写したとする五部大乘經はもとも存在しなかったことを明らかにした。本稿ではそれをうけて、『保元物語』崇徳院怨霊譚の核をなしている崇徳院自筆五部大乘經が、どのような背景から、いかなる構想をもつて創造されたのかという点について検討するものである。

## 一 五部大乘經の構想

まず最初に『保元物語』諸本および『平家物語』諸本を比較し、崇徳院怨霊譚がいかにして形成されていたかという点について考察していく。金刀比羅本『保元物語』<sup>＊2</sup>「新院御経沈めの事付けたり崩御の事」には、

後生菩提の爲にとて、御指のさきより血をあやし、三年が間に五部大乘經を御自筆にあそばされたりけるを、かゝる遠島に置奉事痛しければ、鳥羽の八幡辺にも納奉べきよし、御室御所へ申させ給ふ。

### (中略)

「吾深罪に行れ、愁鬱浅からず。速此功力を以、彼科を救はんと思ふ莫太の行業を、併三惡道に抛籠、其力を以、日本国の大魔縁となり、皇を取つて民となし、民を皇となさん。」とて、御舌のさきをくい切て、流る血を以、大乘經の奥に、御誓狀を書付らる。

と、崇徳院は指先から血を流して三年かかつて五部大乘經を書写し、それを京都に安置してほしいという希望を持っていたが、受け入れられなかったため、經を地獄・餓鬼・畜生の三惡道に抛つて大魔縁となろうとして、舌を噛み切つてその血で大乘經の奥に誓狀を書いたとしている。ここで記される、自らの血をもつて經を書写するというのは、どこから考え出されたのであるうか。藤原頼長の『台記』久安元年（一一四五）閏十月廿五日条には、

自<sup>二</sup>今日、書<sup>二</sup>血經藥師經<sup>一</sup>也、令<sup>三</sup>修理大夫敦任<sup>件人</sup>、<sup>仍役此事</sup>去年書血經

割<sup>二</sup>左手指<sup>一</sup>、取<sup>二</sup>其血<sup>一</sup>、今日割<sup>二</sup>食指<sup>一</sup>、<sup>〔藤原頼長〕</sup>左大弁卿  
着<sup>二</sup>束帶<sup>一</sup>、持<sup>二</sup>來賀表草<sup>一</sup>、<sup>〔統體紙一枚書之、無札紙〕</sup>  
廿六日条には、<sup>〔件草可統體別記〕</sup>

今日割<sup>二</sup>將指<sup>一</sup>、  
さらに廿七日条に、

今日、割<sup>二</sup>無名指<sup>一</sup>、午刻、書<sup>二</sup>藥師經<sup>一</sup>了、依<sup>二</sup>血余多<sup>一</sup>、又書<sup>二</sup>壽命經<sup>一</sup>、申刻書了、

とあり、自分の指を切つた血で經を書写するという例を平安末期に見出すことができる。この行為は自らの信仰心の高まりから起きた結果であり、經のさらなる功德を期待するものとみなすことができる。

『保元物語』との関係で注目されるのは、『石清水祠官系図』<sup>＊3</sup>兼清の項に、「異本云」として、

康平五年四月廿七日程幸、叙<sup>二</sup>法眼<sup>一</sup>、自<sup>二</sup>件日<sup>〔OAS〕</sup>隱居不出仕<sup>一</sup>、是修理別当清秀被<sup>レ</sup>超<sup>二</sup>越別當職<sup>一</sup>故也、所<sup>二</sup>転読<sup>一</sup>之三千部法華經、半者廻<sup>二</sup>向後生菩提<sup>一</sup>、出<sup>二</sup>離生死<sup>一</sup>、半者廻<sup>二</sup>向三惡道<sup>一</sup>、報<sup>二</sup>彼憂<sup>一</sup>云々、同六年十月七日拳<sup>レ</sup>手嚙<sup>レ</sup>舌入滅、生年五十四、

とあり、さらに「異本云」として、

千部法華説誦、宝前參、舌嚙切、西方ノ衆ヲ可<sup>レ</sup>滅願意也、<sup>〔清成清秀ノ後胤也〕</sup>  
無<sup>レ</sup>程皆亡矣、當時西ノ胤無<sup>二</sup>一人<sup>一</sup>云々、兵器入棺葬送、<sup>〔遺書ト云々〕</sup>

とある点である。<sup>＊4</sup>石清水八幡宮祠官の兼清は、転読した三千部の法華經を、半分は自己の後生菩提のために回向して輪廻転生

から離れようとし、残り半分を、自分を超越して別当職についた清秀に対して、その憂いを報いるために、三悪道に回向すると誓い、舌を噛み切つて自殺し、棺の中に兵器を入れて葬るように遺言している。そして清成・清秀父子はほどなく亡くなり、西方の血筋を引くものは途絶えたという。経を「三悪道」に抛つという点、舌を噛み切るという点、恨みにより相手方を滅ぼすという点で、『保元物語』と酷似している。

『石清水祠官系図』の成立は不明だが、奥書にあるように、別当の田中家に伝えられたもので、最終的には延宝九年（一六八一）九月にまとめられているが、代々書き継がれてきたものと考えられている。問題となる部分も、諸説をそのまま載せていることから、石清水八幡宮において独自に伝えられていた説話とみなしてよいだろう。

『保元物語』の作者についても確定されていないが、「仁和寺文化圏」と大きな関わりがあったことが指摘されている。また、仁和寺と石清水八幡宮との関係についても密接な関係があったことがうかがわれる。『徒然草』第五十二段には「仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちより詣でけり」とあるが、これは単に仁和寺の法師が物見遊山で石清水八幡宮に行きたかったわけではないであろう。「年比思ひつること、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」と法師が感想を述べていることから、仁和寺の法師にとっては石清水八幡宮は特別の社であったことが推測される。また、『石清水祠官系図』からは、仁和寺已講律師理範など、石清水の祠官で仁和寺に関係の

ある人物を何人もあげることができるし、『仁和寺御伝』に、承元二年（一二〇八）十月十六日に、後白河院第八皇子後高野御室の八幡宮参詣、天福二年（一二三四）四月二十六日に後高倉院第二皇子金剛定院御室の八幡宮参詣をあえて記していることから、両者の密接な関係を推定できる。さらに、『古事談』第五神社仏事「八幡檢校僧都成清事」には、石清水八幡宮第三十代別当となつた成清は、母である小大進が亡くなつた後、仁和寺辺に籠居し、夜に仁和寺の弊房を出て徒歩で石清水八幡宮に百夜参詣し、曉方に帰つたことを記している。

以上の両者の深い関係からして、石清水八幡宮に伝えられていた説話を利用して、仁和寺の法師が、書写した経を三悪道に回向して、死後崇ろうとしたことと、舌を自分で自殺したこと、そしてその結果相手方の系統が途絶えたという点を取り込んで、崇徳院怨霊譚にまとめていったのではないかと推測される。『吉記』寿永二年（一一八三）七月十六日条にのせる崇徳院自筆血書五部大乘経が存在したとされるのも仁和寺であった。

さらに、五部大乘経について考察する上で注意しなければならないのは、『保元物語』諸本および『平家物語』で、書写の仕方が微妙に異なっているという点である。半井本・京図本・古活字本・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』では、書写した五部大乘経をせめても都の入口に置きたかつたが、信西の拒否にあり、それを恨んで自らの舌先を食いきつて、その血で経の奥に誓状を書いたことになっており、大乘経の本文は墨で書いたことになっている。それに対して、鎌倉本・金刀比羅本・延慶本『平家物語』では、指の先から血をしたたらせて五部大乘経

を書写したことになる。写経の目的についても、二つのグループに分けることができる。半井本・京図本・金刀比羅本・長門本『平家物語』では、後生菩提・来世のためであるのに対し、鎌倉本・延慶本『平家物語』では、この世を恨んで書写したとされている。諸本によるこの違いはすでに多くの先学によって指摘され、伝本関係が考察されているが、これを物語の創作という視点から考えると、以下のように考えるのが最も整合性が高いであろう。

『保元物語』で五部大乘経の存在を語ることとなった原形として考えられるのが、先にあげた『吉記』寿永二年七月十六日条の記事であるが、ここでは「御自筆以血令書五部大乘経」と、自らの血で大乘経を書写したことになる。この記事自体は、崇徳院の怨霊の存在を語っていくため、先にあげた血書経の記事や『石清水祠官系図』等のもとなった伝承を参考に、巧みに創作されていったものと思われる。物語の作者は『吉記』のこの記事もしくは風聞を当然耳にしていたはずであり、鎌倉本、延慶本『平家物語』はそれを受けて、経が崇徳院の血書であることを記し、ならば経を書写する段階で、崇徳院はすでにこの世に恨みをもっていたはずだと考え、大乘経書写の際に髪をそらず、爪も切らずに、柿の頭巾、柿の御衣を着て書写したとしており、『吉記』の記事を忠実に具現化させている。そのため、延慶本『平家物語』では、「御指ヨリ血ヲアヤシ、五部大乘経ヲアソバシテ」とする一方、それを受けている部分では「形ノ如ク墨付ニ」と、墨で書写したことを残す記述となっており、はじめは半井本系統の諸本をもとに墨で書写してい

たとするものの、『吉記』の記事に引きずられて、経自体も血で書いたとの記述に改めたのではないだろうか。

それに対し、半井本等では、舌先を食いきった血で経の奥に誓状を書いた後に、髪をそらず、爪も切らず、生きながら天狗の姿になったとしており、『吉記』から離れて整合性をもたせ、善根のために書写した経でさえも都に安置することがかなわなかったことにより、それを三悪道に抛つという大転換を見せ、怨霊の発動をよりドラマチックに表現しようとしている。舌先を食いきるということは死を意味しており、現実としては当然不可能なことであり、それを実行してまでも誓状を書きあげたということと、崇徳院の怨念の強さを表そうとしたのであった。五部大乘経はあわせて百九十巻あり、書写するのは容易なことではなく、ましてや自らの血で書写することなど不可能であることを、半井本の作者は理解していたことも、本文は墨で書写したとする記述につながっていったはずである。金刀比羅本では、両者を取り混ぜており、後生菩提のために指先の血で経を書写したことにしたため、やや切迫感に欠ける印象を与える結果となっている。

## 二 五部大乘経の安置場所

次に、五部大乘経の安置場所について考える。五部大乘経は華嚴経・大集経・大品涅槃経・法華経・涅槃経からなり、大乘經典の要典を集めたものとして一切経の権輿と称され、平安時代後期以降、一切経を要約した重要經典として重視された。これを龍宮に納めるという思想は中国においてすでにあり、『大方

等大集經<sup>\*19</sup>卷第四十五「日藏分護塔品第十三」には、

爾時娑伽羅龍王、復作是言、若仏世尊不入大海、我

當抄<sup>レ</sup>此日藏授記大集經典<sup>ニ</sup>置<sup>中</sup>我宮中<sup>上</sup>、以是因縁、於

彼海中<sup>下</sup>幾許諸龍福德增長、仏言龍王、隨所有<sup>レ</sup>処抄<sup>二</sup>

此日藏大授記經<sup>一</sup>、如法安置恭敬供養、則能獲<sup>レ</sup>得十種利益

と、日藏授記の大集經典が海中の「宮中」に安置されており、そこには龍王がいたことが記されている。また「龍樹菩薩伝<sup>\*20</sup>」には、

龍言、如我宮中所有經典、諸処此比復不可<sup>レ</sup>数、

と、「宮中」には非常に多くの經典が安置されていることが記されている。龍樹自身、海中にある宮中に行つて經典を得、龍と問答をし、龍によつて現実世界に送られてきて、「以龍成<sup>二</sup>其道<sup>一</sup>」たことにより「龍樹」と名づけられたという。これが十三世紀中頃に成立した『阿婆縛抄<sup>\*21</sup>』巻一九四になると、「或書二云、龍樹菩薩ハ龍宮成道ノ故ニ龍」と、原文にはない「龍宮」という語がつけ加わってくる。また、十三世紀はじめに成立した『三論祖師伝集<sup>\*22</sup>』でも、「伝文云」として「然後、入<sup>二</sup>於龍宮<sup>一</sup>」とあり、「花嚴伝云」として「龍樹、從<sup>レ</sup>龍宮<sup>ニ</sup>將<sup>レ</sup>經出已」とあり、「龍宮」と明示されている。「宮中」としか記されなかったのが「龍宮」と記されるようになる背景には、龍宮に対する具体的イメージが形成されていったことがあるものと思われる。

龍宮に関するイメージの拡大とともに、五部大乘經を龍宮に安置するという思想は、中世のさまざまな文学作品に見られるようになる。水原一が指摘するように、『とはずがたり<sup>\*23</sup>』巻三に

は、後深草院の龍姫二条に恋慕した有明阿闍梨が、「下界にて、今一度の契りを結ばんの大願」のため五部大乘經を書写し、その心情を二条に語る場面で、

この經、書写は終はりたる。供養を遂げぬは、この度一所に生まれて、供養をせむとなり。龍宮の宝藏にあづけたてまつらば、二百余卷の經、かならずこの度の生まれに、供養を演ぶべきなり。されば我、北邸の露と消えなん後の煙に、此經を新に積み具せんと思ふなり。

とある。さらに『地藏堂草紙<sup>\*25</sup>』には、

さては、うたかひなく、龍宮に、きにけりと、世中も、けうとく、おほえけるうへ、(中略)書をかれし經も、とりいて、見せ奉るへし、この城の經藏に、もろくの經を、は、あつかりをく、ならひにて、侍るほとに、

とあり、龍宮には經藏があり、諸々の經典がそこに納められることによつて供養が遂げられるという思想が中世には広く流布していたことがわかる。さらには、光宗が文保二年(一二三二)にまとめた天台教学の書である『深風拾葉集<sup>\*26</sup>』巻第三十六「弁財天秘決」に、

一、龍宮收諸教法事、示云、凡龍神者、三毒等分極成、体煩惱黑菩提、本深也、愚癡黑暗、体<sup>ナルカ</sup>故<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>居<sup>ニ</sup>龍宮<sup>ニ</sup>、表<sup>ニ</sup>生死<sup>ニ</sup>沈没<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>居<sup>ニ</sup>ス<sup>ニ</sup>大海<sup>ニ</sup>、最底<sup>ニ</sup>、所詮無明、体<sup>ハ</sup>龍神也、故<sup>ニ</sup>諸<sup>ニ</sup>教法滅<sup>ニ</sup>龍宮<sup>ニ</sup>收<sup>ニ</sup>、

とあり、巻第八「真言秘奥抄」には、

一、何故<sup>ハ</sup>法滅<sup>ニ</sup>時經卷如納<sup>ニ</sup>龍宮<sup>ニ</sup>耶、一、龍宮<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>尽癡室也、尽癡<sup>ハ</sup>源<sup>ハ</sup>無明也、故<sup>ニ</sup>仏法<sup>ニ</sup>法性滅<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>無明<sup>ニ</sup>本源<sup>ニ</sup>也、

とあることから、仏法が減びるとき、龍宮に経巻が安置され  
と考えられていたことがわかる。五部大乘経が海底に沈められ、  
龍神の住む龍宮の宝蔵に預け置かれたことで、この世の転覆と  
乱世の出現が可能になると信じられていたのであった。<sup>\*27</sup>ゆえに、  
『保元物語』を創り上げるのにあたって、五部大乘経が海底に  
沈められたと記した背景には、この行為によって崇徳院の怨霊  
の発動が期待できるという、物語創作上の確信があったものと  
思われる。

怨霊と龍宮あるいは龍とは深い関わりがあるようで、『愚管抄』  
『水鏡』『帝王編年記』では、巫蠱大逆の罪に問われて廃后とな  
った井上内親王が「現身に龍」になったことを記している。さ  
らには、貞観御霊会の行われた神泉苑には龍神が住んでいて異  
界との接点であり、かつ龍宮への入口であって、龍王がここか  
ら現世に入り出すと思われていたようであり、『今昔物語集』  
巻第十四「弘法大師、修請雨經法降雨語第四十一」には、善如  
龍王がこの池に通って雨を司っていたことが記されている。<sup>\*28</sup>  
そして、『続古事談』第四神社仏事や『釈日本紀』巻第七、述義  
三、神代上に見えるように、祇園御霊会の行われる祇園社の下  
には龍宮に通じる穴があったと思われていた。<sup>\*29</sup>これは「祇園牛  
頭天王縁起」に記す、牛頭天王が龍宮に行つて沙竭羅龍王の第  
三女婆利采女との間に七男一女をもうけたという縁起譚から、  
祇園社の下の龍穴が考え出されたものと思われる。<sup>\*31</sup>

龍宮および崇徳院との関係で注目されるのは、安徳天皇の例  
である。<sup>\*32</sup>建久二年（一一九一）閏十二月、後白河院は病に悩ま  
され、崇徳院と安徳天皇の怨霊に鎮謝し、それぞれ讃岐と長門

に堂を建立するよう命じていることからわかるとおり、<sup>\*33</sup>ともに  
後白河院により非業の死に追いやられたため、後白河院はその  
怨霊が自らにふりかかっていると認識し、鎮魂をはかった。  
安徳天皇が宝剣とともに海中に沈んでいた際、海底には龍宮  
城があり、「海二入ル者ハ必ズ龍王ノ眷属トナルト、心得テ候」  
と、安徳天皇以下が龍神の眷属となったことを建礼門院が夢に  
見ており、宝剣は「龍神是ヲ取テ龍宮ニ納テケレバ、遂ニ失ケ  
ルコソ浅猿ケレ」<sup>\*35</sup>と龍神が奪い取ったことになっている。また、  
『往生要集』<sup>\*36</sup>巻上の畜生道について述べている箇所、畜生道  
の住処には二つあるとし、「根本は大海に住し」ており、「また  
もろもろの龍の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし」  
とあるように、龍の眷属となるとされている。『平家物語』では、  
安徳天皇や平氏は海中に沈んで畜生道に落ち、龍神の眷属とな  
ったとみなされたのであった。そして、安徳天皇はその誕生の  
時から龍神の再誕として『平家物語』では叙述されている。こ  
のことから考えると、龍宮とは、天皇によって支配されている  
現世を、見えない力によって操るもうひとつの世界であると認  
識されていたことがわかる。

平家が滅亡したあと大地震が起きて多大な被害が出たことに  
対して、『平家物語』では平家の怨霊の仕業であることを述べて  
いるが、『愚管抄』巻第五では、「事モナノメナラズ龍王動トゾ  
申シ。平相国龍ニナリテフリタルト世ニハ申キ」と記されてい  
ることが注目される。平清盛が龍となつて地震を起こしている  
というのだが、龍王動とは、『塵添壺囊鈔』<sup>\*37</sup>巻第十四地震動ノ事  
に、地震の原因としてあげられる火神動・龍神動・金翅鳥動・

帝釈動の四種のうちの一つである。<sup>\*38</sup>このため、地震は龍神の仕業であると理解されていたのである。さらに、嘉元三年（一三〇五）に作成されたと考えられる金沢文庫蔵日本図<sup>\*39</sup>では、日本列島が龍によって囲まれている姿を描いている。龍によって領土が取り巻かれるというのは、インドから伝わった世界観であるが、必ずしも地震と結びついているわけではなかった。<sup>\*40</sup>近世初頭に描かれる、龍が日本を取り囲んでいる図では、地震と密接に関わっているが、金沢文庫蔵日本図の龍が日本を取り巻く姿は、日本が龍によって支配されていることを示す図であると考えたい。これは両義性をもっており、日本を守護しているという面と、災異を引き起こすという面をもっていた。そのため、龍王の脳中から出た玉といわれる如意宝珠などの財宝がうずたかく積まれている龍宮という面と、地震・雷・洪水・旱魃などの災異を引き起こす龍によって支配された龍宮という面が重ね合わされているのである。災異は人為によって支配することができず、その頻発は天皇の徳の欠如を意味していた。そのとき現世を超越した世界として構想されたのが龍宮であり、天皇と対峙する龍神であった。ゆえに人知を超越し、天皇が支配する現世を左右する存在として、龍神は怨霊と結びつくのである。そのため、怨霊の鎮魂は王権にとつては欠かすことのできない行為であった。

ここで、『保元物語』『平家物語』諸本の比較に戻って、五部大乘経の行方を検討してみると、大きく二つに分けることができる。半井本・京図本・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』では、その行方を記していないのに対し、鎌倉本では「海底に入

させ給にけり」とし、金刀比羅本では暫状を書いて「海底に入させ給ひける」と、海底に沈めたとしている。古活字本では「千尋の底へしづめ給ふ」とし、延慶本『平家物語』でも「海底に入レサセ給ニケリ」とあり、海底に沈めたことになっており、『吉記』で仁和寺の元性法印のもとへ運ばれたことになっているのと相違を見せている。この点に関しては、旧稿で言及したように、実際には存在しなかったために定説を見ず、物語の構成上で相違を見ているものと思われる。半井本以下の諸本では、作者は仁和寺に五部大乘経が存在するとの『吉記』の記事あるいはその風聞を聞いていたため、『石清水祠官系図』の兼清の記事のもととなるような伝承を参考にして、五部大乘経を書写して、奥に舌を噛み切った血で怨霊となる旨を書いた崇徳院の姿を劇的に創り上げたのであった。しかし、仁和寺にあるとされる五部大乘経と齟齬をきたさないために、その後の行方をあえて記さなかったものと推測される。それが鎌倉本・延慶本『平家物語』の系統では、崇徳院の怨霊の発動をさらに劇的にするために、五部大乘経を龍宮があるとされた志度沖の海底に沈めたことにし、怨霊の発動を期待させたのであった。そしてこれは、龍神の再誕であった安徳天皇の海没譚に影響されて、崇徳院の怨霊を語っていくための構想であった

### 三 崇徳院崩御の地

次に、崇徳院の亡くなった場所について考察する。崇徳院は長寛二年（一一六四）に亡くなるが、その場所については、『今鏡』『百鍊抄』『皇代記』『二代要記』など、すべて讃岐国であつ

たとし、それ以上は記さない。一方、半井本『保元物語』では、八年ト申シ長寛元年八月廿六日、御歳四十五ト申シニ、讃岐国府ニテ御隠レアリヌ。当国之内、白峰ト云所ニテ、薪二積ミ籠奉ル。煙ハ都ノ方ヘゾ靡キヌラムトゾ哀レ也。

と、讃岐国府で亡くなったとしている。<sup>\*41</sup>そして、京図本が「讃岐の府中鼓岡」であるのに対し、鎌倉本では「志度の道場と申山寺」となっており、金刀本では「四度の道場辺、鼓岡」、古活字本では「志戸」、『平家物語』諸本では「志度」としている。

この相違は、先に述べた五部大乘經の行方にほぼ対応していることが注目される。鎌倉本以下の『保元物語』諸本と『平家物語』では、亡くなった場所に志度が関係していることがわかるが、この説話の変化に大きな影響を与えているのは、大川郡志度町の志度寺の存在であるのではないだろうか。志度寺の創建年代は不詳だが、『梁塵秘抄』に「四方の靈驗所は、伊豆の走井、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生と讃岐の志度の道場とこそ聞け」と記されるほど、古くからの修験道場であった。志度寺には十四世紀前半に描かれ絵解きに用いられていた『志度寺縁起絵』が存し、志度の沖には龍宮があると考えられており、縁起絵には志度寺に隣接して地獄や龍宮が描かれている。<sup>\*42</sup>

地獄と龍宮はしばしば重ねて描かれることがある。吉野金峰山は日藏の地獄めぐりで著名であるが、『古今著聞集』巻第二「貞崇禪師金峰山神変に就いて述ぶる事」では、金峰山に阿古谷という谷があり、そこには八体の龍が住んでいるが、これは元興寺にいた阿古という童子がこの谷に身を捨てて龍と化したとい

うことによるものであるとの伝承を伝えている。笠置山にも兜率浄土への入口の龍穴がある一方で、地獄があるとも考えられていた。<sup>\*44</sup>地下と海底という類似から、両者が密接に絡み合っているイメージが創り上げられていったものと思われる。

『志度寺縁起絵』に付属している縁起文「讃岐志度道場縁起」の概要を記すと、唐の高宗からの珍宝を載せた舟が讃岐国房前浦で転覆し、玉だけは海底の龍神が奪い取ってしまった。そこで藤原不比等が現地に赴くがなすすべなく杲然とし、海人泉郎の娘と配偶の契りを結んで奈良に戻った。そして男子が生まれ、母はその子を藤原氏の嫡子にと望み、海に潜り龍宮の水精十三重塔に玉が安置されており、自らの命を犠牲にしてその玉を持ち帰った。そしてその女を葬った場所に死度道場を建立し、如意宝珠は興福寺に安置されて藤原氏の繁栄を守護したという。そして房前は不比等のあとをつぎ、十三歳の時に行基と共に道場を訪れて修造し、一千基の塔を建てて供養したという。この話は謡曲『海土』となっており、世阿弥当時すでに行われていた古作であるらしいことから、<sup>\*46</sup>広く知られた有名な話であったようである。

この説話の淵源を求めると、『日本書紀』允恭天皇十四年九月甲子条に、阿波国長邑の人男狹磯が命を賭して大蝦を捕らえ、その腹の中から真珠を得て島の神に捧げて祟りを鎮めた話を載せるが、古くから志度の沖合の海底には龍宮があると思われるようにである。<sup>\*47</sup>

以上のことから考えると、半井本が比較的古態をとどめているのに対し、鎌倉本以下の『保元物語』諸本及び『平家物語』



諸本では、当時よく知られていた志度沖の龍宮説話の影響を受けて崇徳院説話が形成されたものと推測できる。ゆえに水原一が指摘するような「志度郡直島」という実際には存在しない郡名までも用いるようになったものと考えられる。四度（志度）の道場は志度町であるのに対し、鼓岡は坂出市府中町の讃岐国府のすぐ西にある岡で、距離はかなり離れている。崇徳院は鼓岡で暮らしていたのであるから、亡くなった場所だけ志度であると記すのは唐突であり、事実とも異なる。それをあえて志度と結びつけたのは、志度寺沖の龍宮伝説に影響されてのことであろう。志度寺が仁和寺末であったことも、志度が説話に取り込まれる要因となったものと思われる。

そして、さらに在地に残された『白峯寺縁起』<sup>\*49</sup>になると、

我大魔王となりて、天下を我まゝにせんと御誓ありて、小指をくひきらせ給て、五部大乘経の箱に、龍宮城に納給へとあそはして、椎途の海に浮させ給ひたりければ、海上火にもえてみえけるに、童子出て舞をまひて納ける。そのとき讃岐院、さては我願成就しけりとて、御くしをもそらす、供御をもまいらすしてましくけるに、

のように、はっきりと龍宮に五部大乘経が納められたことを記すようになる。『白峯寺縁起』は奥書にあるように、応永十三年（一四〇六）に清原良賢が寺の再興にあたって、寺に伝わる記録などを見ながら記したもので、『保元物語』や『平家物語』や『記録類』さらには都の人々の噂や考え方も加味されて記された。<sup>\*50</sup>

『白峯寺縁起』に記される大乘経を燃やしたことが、竜宮に経が納められて願が成就したことにつながるという点に関して

は、田中貴子が紹介した東寺観智院蔵「五秘密護摩次第」<sup>敬愛</sup>（正和元年（一一三二）奥書）の識語に、

此観行御暗誦終篇之後投<sup>\*51</sup>火中、可<sup>二</sup>今龍宮宝蔵御<sup>一</sup>矣、とあり、經典の供養が終わった後、火に投じることによって龍宮の宝蔵に預け置かれることとなると考えられていたことがわかる。先にあげた『とはずがたり』の記事からもそのことがうかがわれる。

以上のことから考えると、半井本に対し、やや遅れて成立した諸本においては、崇徳院が亡くなった讃岐国府からそれほど遠くない地にある志度寺とその周辺の伝承の影響を受け、志度において崇徳院が亡くなったということ、志度沖の海底に五部大乘経が沈められたという改変が加わったものと結論づけることができる。

### おわりに

本稿では、『古記』『保元物語』『平家物語』に述べられる崇徳院自筆五部大乘経について検討し、この記述がどのような構想のもとに創作され、物語につけ加えられることになったかを明らかにした。そして、五部大乘経の構想は、石清水八幡宮に伝わる伝承のもとに仁和寺で創り上げられたものであり、諸本の異同には、讃岐の在地信仰が介在し、志度寺やその沖の龍宮伝説、さらには海底に沈んだ安徳天皇の龍神変成譚から影響を受けている諸本もあるのではないかという結論に達した。

もとより、以上の内容は物語内部の部分的比較により検討した結果であるが、『保元物語』全体として崇徳院の怨霊が構想さ

れた背景には、承久の乱により隠岐に流され望郷の思いを秘めて亡くなった後鳥羽院の怨霊があつたのではないだろうか。『六代勝事記』の後鳥羽院配流の記述をもとに『保元物語』の崇徳院配流説話が書かれたとの指摘もあり、『保元物語』が創作されていった時期は後鳥羽院の怨霊が跳梁していた時期であるので、後鳥羽院の例を参考にして崇徳院怨霊譚が形成されていったのではないかと推測している。この視点から『保元物語』の制作年代も確定していくことができるのではないかと思われるが、この点に関しては稿を改めて述べたいと思う。

注

- \* 1 山田雄司「讃岐配流中の崇徳院の実像―『保元物語』の虚構―」上田正昭編『古代の日本と渡来文化』学生社、一九九七年
- \* 2 『日本古典文学大系』
- \* 3 『続群書類従』第七輯上系図部
- \* 4 志村有弘「石清水八幡宮と説話―一つの説話伝承圏―」〔解釈〕二二三、一九七六年三月、『往生伝研究序説―説話文学の側面―桜楓社、一九七六年所収〕に石清水八幡宮関連の説話を載せる。
- \* 5 『群書解題』
- \* 6 水原一「崇徳院説話の考察」〔駒沢国文〕七、一九六九年六月、須藤敬「『保元物語』形成の側面―多近久と仁和寺―」〔三田国文〕四、一九八五年一〇月
- \* 7 志村有弘「石清水八幡宮と仁和寺―『徒然草』第五十二段の背景―」石黒吉次郎・志村有弘・高橋貢・松本寧至編『徒然草発掘』叢文社、一九九一年七月
- \* 8 『仁和寺史料』寺誌編二、奈良国立文化財研究所、一九六七年
- \* 9 『新日本古典文学大系』
- \* 10 早川厚一・弓削繁・原水民樹編『京都大学附属図書館蔵保元物語』和

泉書院、一九八二年

- \* 11 『日本古典文学大系』
- \* 12 『平家物語長門本』名著刊行会、一九七四年
- \* 13 『源平盛衰記』三弥井書店
- \* 14 半井本では、経を八幡・鳥羽・長谷でもよいから、都のほとりに置きたいことを記しており、『新日本古典文学大系』の注では、長谷を長谷寺所在の大和国磯城郡初瀬の辺と解釈しているが、経をせめても都の入口に置きたいということが重要であるので、現京都市左京区岩倉の長谷（ながたに）でなければならぬ。
- \* 15 北川忠彦・竹川房子・大井善壽編『鎌倉本保元物語』三弥井書店、一九七四年
- \* 16 『延慶本平家物語』勉誠社、一九九〇年
- \* 17 水原一前掲論文、服部幸造「延慶本平家物語と鎌倉本保元物語―崇徳院説話をめぐって―」『名古屋大学国語国文学』二七、一九七〇年二月、山内益次郎「崇徳院慰霊―今鏡の周辺―和泉書院、一九九三年
- \* 18 「今鏡」水茎に「五部の大乗、大般若などだにありがたく侍るに」とある。
- \* 19 『大正新修大蔵経』第十三卷大集部
- \* 20 『大正新修大蔵経』第五十卷史伝部二
- \* 21 『大日本仏教全書』
- \* 22 『大日本仏教全書』
- \* 23 水原一前掲論文
- \* 24 『新日本古典文学大系』
- \* 25 『室町時代物語大成』補遺二、角川書店、一九八八年
- \* 26 『大正新修大蔵経』第七十六卷統諸宗部七
- \* 27 山本ひろ子「龍女の成仏―『法華経』龍女成仏の中世的展開―」『変成譜―中世神仏習合の世界―』春秋社、一九九三年
- \* 28 天海蔵『直談因縁集』でも同様の記事が見られることが、田中貴子『百鬼夜行の見える都市』（新曜社、一九九四年、八一頁）によって指摘されている。
- \* 29 松前健「祇園牛頭天王社の創建と天王信仰の源流」角田文衛博士古稀

記念『古代学叢論』角田文衛先生古稀記念事業会、一九八三年

\* 30 『続群書類従』第三輯上神祇部

\* 31 龍穴に関しては、日下力『平治物語』惠源太雷化話の展開―二つの滝と竜神信仰―（『軍記と語り物』一六、一九八〇年三月）で分析されている。

\* 32 安徳天皇と龍神との関係については、生形貴重『平家物語』の始発とその基層―平氏のモノガタリとして―（『日本文学』二七―二八、一九七八年二月）、『平家物語』の基層と構造―水の神と物語―近代文藝社、一九八四年所収、同『延慶本『平家物語』と冥界―龍神の侵犯と世界の回復―大將軍移移の構想―』（『日本文学』三六―四、一九八七年四月）、同『平家物語』における安徳天皇と龍神―延慶本を中心にして―（『大谷女子短期大学紀要』三二、一九八九年三月）から示唆を得た。

\* 33 『玉葉』建久二年閏十二月十四・十六・廿・廿一・廿二・廿四・廿八・廿九日条

\* 34 『延慶本平家物語』第六末 廿五「法王小原へ御幸成事」

\* 35 『延慶本平家物語』第六本 十九「靈劍等事」

\* 36 『日本思想大系』

\* 37 『大日本仏教全書』

\* 38 龍神動の淵源は、『大智度論』巻第八に見られる。

\* 39 『日本古地図集成』日本全図、一九七一年

\* 40 大林太良『地震の神話と民間信仰』『東京大学公開講座二四地震』東京大学出版会、一九七六年

\* 41 半井本では亡くなったのを長寛元年とするが、他の史書においてはすべて長寛二年となっており、半井本の誤りである。

\* 42 梅津次郎『志度寺縁起絵に就いて』『国華』七六〇、一九五五年、大西昌子『地獄と龍宮と大寺と―志度寺縁起―に見る』『朝日百科日本の歴史別冊歴史を読みなおす』大仏と鬼―見えるものと見えないもの―一九九四年四月

\* 43 『日本古典文学大系』

\* 44 龍宮と地獄との関連については、浅野祥子『龍宮について―地獄との類似性―』（『国文学踏査』一五、一九八九年三月）で考察されている。

\* 45 和田茂樹・友久武文・竹本宏夫編『瀬戸内寺社縁起集』広島中世文芸研究会、一九六七年

\* 46 佐成謙太郎『謡曲大観』第一巻、明治書院、一九三〇年

\* 47 『志度寺縁起』第二『志度道場縁起』では、この話は、志度の海人が海底の龍宮に潜り、自分の命と引替に宝珠を取り返す話となっている。

\* 48 水原一前掲論文

\* 49 応永拾三年（一四〇六）孟秋廿五日の奥書を持つ。『香川叢書』第一本多典子『白峯寺縁起』覚書き―讃岐と都・地方と中央―東京都立

50 本多典子『白峯寺縁起』覚書き―讃岐と都・地方と中央―東京都立  
51 大学大学院人文科学研究科国文学専攻中世文学ゼミ『伝承文学論（ジャンルをこえて）―東京都立大学大学院国文学専攻中世文学ゼミ報告―』一九九二年

\* 51 「宇治の宝蔵―中世における宝蔵の意味―」『伝承文学研究』三六、一九八九年五月、『外法と愛法の中世』砂子屋書房、一九九三年所収

\* 52 武久堅『鎌倉本保元物語と延慶本平家物語の先後関係―六代勝事記』との共通本文をめぐって―『國學院雑誌』八二―四、一九八一年四月

（やまだゆうじ 筑波大学大学院 博士課程  
歴史・人類学研究科）

〔付記〕筑波大学大学院今井雅晴ゼミにおいて貴重な意見を下さった各氏に感謝いたします。